

年 組 名前

2020年4月10日付夕刊

笑いの「芸」たゆまず追究

志村けんさんを悼む

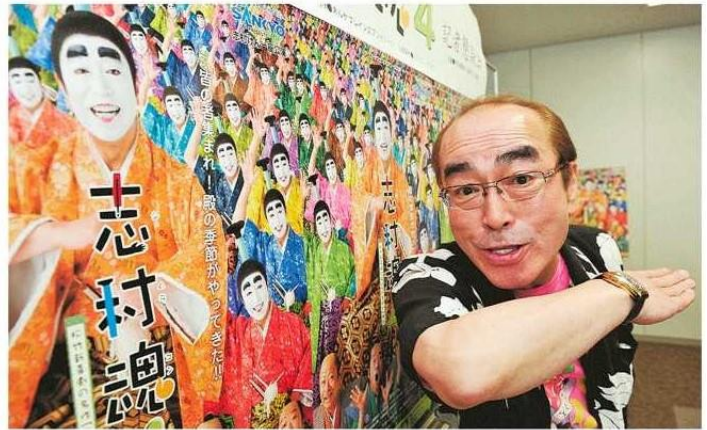
新型コロナウイルスによる肺炎のため三月二十九日に死去した志村けんさん。テレビ番組などで一緒に仕事をすることもあるお笑い評論家の西条昇・江戸川大教授（お笑い論）に、一時代を築いた志村さんの「笑い」に対する情熱、人柄などを聞いた。

志村さんの昔のコントは、今の若い人が見ても絶対に笑える。世代や時代を選ばず、人を笑わせられる貴重な人だった。時代のはやり廃りに頼らず、人間の普遍的な滑稽な部分をわかりやすく演じていたからだろう。

今はしゃべりで笑わせる芸人が主流だが、人物を演じる芸で笑わせられる喜劇人は、志村さん以降いない。みんなが憧れる存在だったが、同じ道を行こうと思っても「芸」が必要なのでなかなかできなかった。

一九八八年、CBC・TBS系「加トちゃんケンちゃんごきげんテレビ」のコント企画会議で、構成作家として志村さんと一年間一緒に仕事した。志村さんは、古今東西の喜劇の先人たちの面白さを研究し、スティックで勉強家な一

お笑い評論家・西条昇さんに聞く



「アイ〜ン」ポスターを決める志村けんさん＝2009年、名古屋市内で

面を見せていた。海外の喜劇映画を徹夜で見るとはコントに生かしていた。取り寄せたビデオの多さはレンタルビデオ店を開けるくらいだったという。落語家の故桂枝雀さんが好きで、目を寄せるオーバーな表情や「すびばせんねえ」というフレーズなどからの影響を感じられた。松竹新喜劇も大好きだった。会議では二時間も三時間も黙り込んで考えることがあった。出演番組の数が売れっ子の指標とされる時代でも、数を絞って練りに練った笑いをぶつける人だった。そうした面を感じさせないナンセンスな笑いで楽しませてくれたが、見えない部分での努力は誰よりもしていたと思う。主演を務める予定だった山田洋次監督の新作映画は、喜劇界の神様二人の夢の顔合わせだった。志村さんはコントの笑いがメインだという意識が強く、これまでドラマや映画にほとんど出てこなかったが、七十歳を迎えての新たなチャレンジだった。もう見られないのは本当に残念だ。

（聞き手・原田晋也）

問い：志村けんさんの「笑い」に対する情熱、人柄などで心に残ったことをメモしましょう。

メモ欄

【活用にあって】

アンデルセンの『絵のない絵本』の中に、喜劇役者の話があります。喜劇役者になるべくしてなった彼は、愛する人の葬式の日にも舞台に立ちます。心の中に絶望をいだいて踊ったり跳ねたりします。観客からは割れるような拍手喝采^{かっさい}を浴びます。

志村けんさんが新型コロナウイルスによる肺炎のため亡くなりました。「カラスの勝手でしょ」「アイ〜ン」「だいじょうぶだあ」などのギャグ、バカ殿様、変なおじさんといったキャラクターの数々、その姿を見て何度も笑ったことでしょう。子どもたちの人気者でした。

お笑いタレントの志村さんは、いったいどんな人だったのでしょうか。四六時中、笑いを振りまいていたのでしょうか。子どもたちと共に考えてみたいですね。

喜劇で一番難しい役は愚か者の役であり、それを演ずる役者は愚か者ではない。(セルバンテス)